

# 「小児期の成人病危険因子の実態把握に関する研究」 の総括

分担研究者 村田 光 範

要約：この研究班の大きな目的は、小児期における成人病危険因子、なかでも動脈硬化促進危険因子（以下、単に危険因子）の実態を調査することにある。従って、今年度も昨年度に続き、幼児期の肥満、高血圧、高脂血症、食生活を中心に、その頻度や問題点、及びそれらの調査体制の検討を行った。

さらに、この研究班の大きな特徴は、この研究をできるだけ長期にわたって継続し、小児期の危険因子が成人になって持つ意義を明確にすることにあり、このための体制づくりに努力した。

見出し語：動脈硬化、小児成人病、肥満、高血圧、高脂血症、食生活調査、運動、正常値、

スクリーニングシステム

## 目的

この研究班の大きな目的は、小児期における成人病危険因子、なかでも動脈硬化促進危険因子（以下、単に危険因子）の実態を調査することにある。従って、今年度も昨年度に続き、幼児期の肥満、高血圧、高脂血症、食生活を中心に、その頻度や問題点、及びそれらの調査体制の検討を行った。

さらに、この研究班の大きな特徴は、この研究をできるだけ長期にわたって継続し、小児期の危険因子が成人になって持つ意義を明確にすることにある。

## 研究対象

学齢期以後の小児の危険因子については、学校教育や学校保健を介して、危険因子の頻度あるいはそれらに対する対応策などが検討されており、かなり多くの研究成果が報告されている。この研究班では、できるだけ幼児期の小児を対象にして危険因子の実態を調査することにした。

## 研究方法

上記の目的と対象について、各研究協力者間での話し合いを、昨年度の研究当初に持っており、今年度については、その共通理解の基に研究を進めた。

共通理解とは、調査地域を全国各地に設けるこ

---

東京女子医科大学第二病院小児科；

(Department of Pediatrics, Tokyo Womens' Medical College, Daini-Hospital.)

と、幼児を研究対象に取り入れるよう努力をすること（実際には、1歳6カ月、3歳の幼児健康審査あたりの年齢が対象になる）、さしあたり保護者を含む関係者に理解の得やすい肥満を中心に調査し、さらに高血圧、高脂血症などに調査を広げること、幼児期の食生活調査を行うこと、そして、長期のフォローアップ体制を整えることといったことである。

研究の目的とその対象は当然のことながら、フィールドワークの中に求めなくてはならないので、実際の研究方法は、各分担研究者の判断に任せることになった。

#### 研究成績

奥野らは北海道旭川市における3歳児の肥満傾向を調査し、2%前後に肥満がみられること、併せて小学校から中学校にかけての9年間の肥満の推移を検討し、肥満の経過については男女の差があること、年齢に応じた肥満対策の体制を整える必要性について述べている。

小川らは1990年度の岩手県の小・中・高校生8,074名について肥満度、血圧値、総コレステロール値の検討を行った。肥満の頻度は小・中学校で男女とも15%前後、高校生で10%前後であり、文部省の統計などにみられる頻度からすると、相対的に高い数字であった。また、肥満の程度が進むほど血圧、あるいは総コレステロール値が高くなる傾向を示した。

村田らは、千葉県北部の1都市における4、5歳の幼児ほぼ全員と、6年前に検診をしている対象について、その後の血清脂質の経過を検討した。その結果、幼児期でも4-5%の肥満、及び高脂血症がみられること、総コレステロールのトラッ

キングは幼児期から小学生にかけても見られることを報告した。

斉藤らは、千葉県南部の1都市において1982年に肥満であった者の中学3年生での経過と、その時点における肥満度、及び血清脂質との関係を検討した。その結果、小学校1年生の時に肥満度が30%を超える比較的高度の肥満では、その後も肥満の悪化、血清脂質の異常を持つ頻度が高いとしている。

梁らは、静岡県沼津市の幼稚園児の成人病危険因子の保有状況について報告した。調査項目は、肥満度、血清総コレステロール、HDL-コレステロール及び動脈硬化指数である。この結果、これらの調査項目中何らかの異常を示した者は167名中60名と高率であった。このことから、小児期早期からの成人病対策を強調している。

衣笠らは、滋賀県のある町の1歳6カ月児と3歳児の健康審査の成績を過去10年間にわたって検討した。その結果この町では幼児期の肥満頻度の増加傾向はみられなかったとしている。また、3歳児から小学校入学までの間に肥満が進行した者はその後も肥満である傾向が強いといっている。

松田らは、愛媛県松山市の中学1年生全員を対象に成人病予防検診を行っている結果について報告した。今回は事後指導システムが整備され事後指導を行うことにより、高コレステロール血症や肥満の改善に明らかな効果が認められたとしている。

永野らは小児期の食事の中の食塩の摂取量に注目し、ソルトペーパー「栄研」を用いて簡便に食塩摂取量を推定することを検討している。今回は

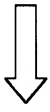
食事管理を受けている養護施設の健康な幼児集団の食塩摂取レベルをこの方法で検討した。この結果、早期尿の食塩排泄量が0.5g以下であることが望ましいが、1g以下であれば、1日の食塩摂取量が目標である5.8から6.6gの間になるとしている。

本田らは、3歳から15歳までの肥満児について、外来で食事療法を中心とした指導を行い、2カ月間の指導においても、肥満度、血清脂質、アポリポ蛋白などの改善がみられたと報告している。また、病的原因で肥満することが多いとされる小人症との対比研究を行っている。肥満という観点からすると、小人症に体型上の大きな問題はなかったとしている。

#### 今後の課題

小児期の危険因子の実態把握することは比較的容易であると思われるが、その発生要因、特に地域差を的確に解析することはさらに時間を要する作業だと思われる。また肥満を除き、小児期の血圧、高脂血症などにつき一定の判定基準を設定するには、小児の正常値の決定をまつ必要があり、これは現在進行中の作業で、これについてもまだ暫くの時間が必要である。

もっとも大きな問題は同一地域、同一集団、同一個人についての危険因子の長期にわたる追跡調査であり、これを可能にするには小児を取り巻く各関係者に対する小児成人病についての地域啓発活動を十分に行うことが必要である。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:この研究班の大きな目的は,小児期における成人病危険因子,なかでも動脈硬化促進危険因子(以下,単に危険因子)の実態を調査することにある。従って,今年度も昨年度に続き,幼児期の肥満,高血圧,高脂血症,食生活を中心に,その頻度や問題点,及びそれらの調査体制の検討を行った。

さらに,この研究班の大きな特徴は,この研究をできるだけ長期にわたって継続し,小児期の危険因子が成人になって持つ意義を明確にすることにあり,このための体制づくりに努力した。